

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720003

研究課題名（和文） カントの「先入見」批判に関する倫理学的研究

研究課題名（英文） An ethical study on Kant's critique of prejudices

研究代表者

千葉 建（CHIBA KEN）

筑波大学・人文社会系・講師

研究者番号：80400620

研究成果の概要（和文）：先入見に関するカントの思想を、同時代の思想的文脈において考察し、それに基づいて現代的意義を検討した。カントは、自らの先入見概念をヴォルフ学派に属するマイヤーの影響の下に展開したが、「人民にとって欺かれることは有益であるか」という1780年ベルリン・アカデミー懸賞問題を契機として、先入見を公共的議論によって徐々に克服してゆくことの重要性を明示的に意識するようになった。こうした背景を理解することで、現代の思想家にも多大な影響を与えているカントの「理性の公共的使用」のもつ倫理的・政治的意味を見定めることができる。

研究成果の概要（英文）：This study considered Kant's thoughts on prejudice within the context of his time and, on this basis, examined their meaning in our contemporary world. Kant's concept of prejudice had been formed under the influence of and in confrontation with G. Fr. Meier, a disciple of the Wolffian school. But it was the 1780 Berlin Academy prize question ("Is it useful for a nation to be deceived") that made him explicitly attentive to the importance of gradually overcoming prejudices through a public discussion. From this background, it can be adequately understood why Kant's contemporarily influential "public use of reason" has an ethical-political meaning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋倫理学、ドイツ啓蒙主義研究

1. 研究開始当初の背景

「先入見」というテーマは、先入見からの解放を目指していた啓蒙主義にとって中心的なものであったにもかかわらず、その後の思想史研究においては、必ずしも十分に考察が進められてこなかった。こうした状況に再

考を促す契機となったのが、ガダマーの『真理と方法』（1960年）であった。ガダマーは、啓蒙主義が先入見一般に対して否定的な評価を下し、先入見は悪いものだという観念を流布させたことが、先入見に対する理解を妨げてきた原因だったと主張し、それに対して、

解釈学の立場から、先入見の意義を強調し、その復権を試みた。

こうしたガダマーの著作のおかげで、先入見に関する研究はふたたび活性化されるようになった。しかしその一方で、ガダマーが批判した啓蒙主義の先入見論に関する研究も進展するなかで、ガダマーの啓蒙主義批判が一面的であることが明らかになってきた。とりわけ、シュナイダースの『啓蒙と先入見批判』(1983年)は、ドイツ啓蒙主義の思想家たちが先入見を一概に否定していたわけではなく、先入見に対して多様なアプローチを取っていたことを提示した代表的著作であり、啓蒙主義の先入見論に対するガダマーの批判に修正を迫るものであった。

こうして、シュナイダースを嚆矢として、ドイツ啓蒙主義の思想家たちの先入見論に関する注目すべき研究がいくつか発表されてきたが、これらは先入見の理論的な側面に焦点を当てたものがほとんどであり、先入見の実践的な側面についてはあまり主題的に論じられてこなかった。

また、ドイツ啓蒙主義の先入見論がカントの思想にどのような影響を与えたのかについても、理論面ではヒンスケが、マイアーの先入見論がカントのアンチノミー論の形成に影響を与えた可能性について指摘していたが、実践的な場面においては、それを主題とした研究は現れていなかった。

こうした背景のもとで、本研究は、とくに先入見の実践的な側面に注目しながら、カントの先入見論をドイツ啓蒙主義の思想的文脈において理解し、それに基づいてカントの先入見批判の倫理的意義を解明することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、(1)カントの先入見批判に関する議論を、ドイツ啓蒙主義の思想的文脈において検討し、その倫理的意義を解明することを目指し、また、それに基づいて、(2)その現代的意義について考察することを目的とした。

(1)啓蒙主義においては、一般に先入見からの解放が目標とされていたこともあって、先入見に関する研究も盛んに行われていた。とりわけドイツ啓蒙主義においては、先入見の本質や原因、先入見の不可避性などに関する理論的な研究とならんで、先入見の有害性や有用性に関する実践的な問題についても議論された。現在では忘れ去られてしまったこうした「啓蒙主義的先入見論」の光のもとでカントの先入見論を考察し、カントの先入見論の特徴を浮き彫りにすることによって、その実践的な意義について検討することを目的とした。

(2)カントの思想は、現代の思想家たちに対して様々な側面で多大な影響を与えてきたが、カントの先入見論については、カント自身が先入見に関するまとまった著作を刊行していないこともあって、それが直接的に現代の思想家によって取り上げられた例はほとんどなかったと言ってよい。しかし、本研究においては、カントの先入見論の特徴を明らかにしてゆくなかで、現代の思想家のうちにもカントの先入見批判の精神を継承している者がいるのではないかという見通しのもとに研究を進め、そうした思想家におけるカント的要素を剔抉することを通じて、カントの先入見論の現代的意義について考察することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)カントが公刊した著作や講義録において先入見に関して言及している箇所を検討することを通じて、カントが先入見に対していかなる見解をもっていたのかを探究した。とくに、カントが先入見について比較的多くの言及をしている論理学関係の講義を中心に考察し、そのさいカントが論理学講義の教科書として用いていたマイアーの『論理学摘要』やその原本である『論理学』、ならびに『人類の先入見論』などのマイアーの著作を参照し、両者の異同を明らかにすることによって、カントの先入見論の特徴と独自性を浮き彫りにしようとした。

また、カントの先入見論の背景をなしている思想的文脈を判明するために、先入見に関する当時の議論を考察した。とくに、カントが先入見の有益性や有害性について考察するきっかけになったと考えられる1780年のベルリン・アカデミー懸賞問題に関連するテキストを中心に研究した。具体的には、その懸賞問題の成立に大きく関与したフリードリヒ大王の先入見論や、その懸賞問題を受けてニコライを中心メンバーとする「啓蒙の友の会(水曜会)」で議論された内容などを検討した。

(2)カントの思想のエッセンスを現代に生かしていると考えられる思想家の著作を読解してゆくなかで、カントの先入見批判のモチーフを継承していると考えられるものを主題的な研究対象として選択することにした。研究を進めていった結果、アーレントの政治的判断論のうちに、カントの先入見論との接点を見いだすことができた。そこで、アーレントの判断論を集中的に検討し、カントの判断論や先入見論との異同を闡明する作業を通じて、カントの先入見論の現代的意義を提示しようとした。

4. 研究成果

(1) カントの先入見論と同時代の先入見論との関係をめぐって

①カントの先入見論をマイアーの先入見論と対比した結果、先入見についてのカントの理解が、必ずしもカント独自のものではなく、マイアーの議論に多くを負っていることが確認された。しかし、カントがマイアーの説明すべてを受け入れているわけではなく、「先入見」を「憶測」から区別するなど、いくつかの点で修正を加えており、それに基づいて自らの議論を展開していることが確認された。

また、カントは、マイアーの先入見論を参考にしながらも、先入見の主要な源泉を「模倣と習慣と傾向性」の三つのうちに見ており、このことがカントの先入見論の特徴的な点であることを指摘した。そして、このことは、カントの先入見論がマイアーのものよりもいっそう主体的で実践的な性格を有していることを証示するものであることを解明した。さらに、カントは、先入見の三つの主要な源泉のうちでも「模倣」による先入見に議論を集中し、模倣から生じる先入見を「理性の受動的使用に向かう性癖」と呼んで批判しているが、こうした模倣から生じる先入見に対する批判が、「啓蒙」に関するカントの議論と密接に関連していることを明らかにした。カントは、模倣から生じる先入見を、「法則のもとでの理性の自発性のかわりに、理性のメカニズムに向かう性癖」とも呼び、その原因を「人間の惰性」のうちに見ているが、カントが『啓蒙とは何か』において主張しているように、「啓蒙」とは、自らの「怠惰と臆病」のゆえに他人の指導に身を委ねることをやめて、自分自身の知性を使用し、自分で考えることに存する。したがって、カントの啓蒙論は、啓蒙の先入見論との対決のなかで展開したものであり、こうした背景を理解して初めて十全に理解しうるものであることを論究した。

このようにカントの術語や思想を当時の思想との対比のもとで明らかにすることは、カント思想の革新性を正しく理解するために基礎的な貢献をなすことができるとともに、カントとドイツ啓蒙主義との関係を再考するうえでも、一つの視点を提供しうるものだと考えられる。

②ドイツ啓蒙主義における先入見論の実践的意味を考察するに当たって、「先入見の有益性」の問題を提起した1780年ベルリン・アカデミー懸賞問題が重要な契機となっていることを明らかにした。そして、「人民にとって欺かれることは有益であるか」というこの懸賞問題の成立には、フリードリヒ大王とダランベールとの間でなされた先入見に関する議論が大きく関与しており、このこと

が当時の先入見についての議論が政治的な意味をもつゆえんになっていることを解明した。さらに、この懸賞問題は、『ベルリン月報』で議論された「啓蒙とは何か」という問いが出される機縁の一つにもなっており、カントの啓蒙論の背景をなしていることを判明にすることができた。

また、こうした背景に照らしてカントの『啓蒙とは何か』を読解することを通じて、カントの啓蒙論のなかには、従来の研究で強調されてきた個人の自立的思考や理性の自律を提唱する「自己啓蒙」という側面だけではなく、「人民啓蒙」の視点から先入見の有用性を批判するというモチーフも含まれていることを究明した。言い換えれば、カントの啓蒙論は、たんに理性の自律性を各人に説く道徳的側面だけではなく、先入見の有用性を擁護しようとするフリードリヒ大王の政策を牽制するという政治的射程も有していることが判明した。

以上の研究成果に基づいて、ここでカントにおける啓蒙論と先入見論との関係について整理するならば、次のようになる。まず、カントの啓蒙論における「自己啓蒙」の側面は、マイアーを中心とするドイツ啓蒙主義の先入見論に関する理論的考察のなかから次第に形成されてきたものである。これに対して、「人民啓蒙」の視点は、先入見の有益性という実践的課題について問う1780年のベルリン・アカデミー懸賞問題を契機として明示的になったものである。さらに、自己啓蒙と人民啓蒙との関係について考察した結果、カントは自己啓蒙がなければ人民啓蒙はありえないと考える点では一貫しているが、自己啓蒙は人民啓蒙から完全に独立しているわけではなく、人民啓蒙は自己啓蒙を促進したり阻害したりする条件ないしは環境として作用しうるものであることを明らかにした。

このように、カントの議論を当時のコンテクストに置き直して理解することによって、カントの啓蒙論についての一面的な理解を超えて、そこに含まれる多様な問題圏を提示することができた。これによって、カントの啓蒙論の独自性と意義を理解するための重要な足掛かりを提供することができたと考えられる。

③さらに、①と②の研究成果に基づいて、カントの啓蒙論を、カントと同様に「啓蒙とは何か」という問いに答えたメンデルスゾーンの議論と対照させることを通じて、啓蒙に対する二人のスタンスの違いを明らかにした。カントは、公務外において自分の意見を公衆に問う「理性の公共的使用」は無制限に認めるべきだが、公務中に自分の意見を論じる「理性の私的使用」は大幅に制限されても構わないと述べたが、これに対して、メンデル

スゾーンは、「理性の私的使用」においてもいっそうの自由を認めることができると主張している。このことは一見すると、メンデルスゾーンの方がカントより言論の自由により多くの余地を与えているように思われるが、子細に検討すれば、事態はそれほど単純とは言えないことが分かる。メンデルスゾーンの立場は、「理性の私的使用」の自由を統治者の側にいっそう認めることによって、いわば「上からの啓蒙」を進展させようとするものである。これに対して、カントの立場は、統治者が改革を推し進めるうえでも、人民の側が議論して納得した範囲内で実行することを条件とするものであり、さらにその改革の問題点を吟味する可能性をつねに公衆に開放しておこうとするものである。それゆえカントは、統治者による上からの啓蒙も、人民による下からの啓蒙も、それ自体としては一方的に自らの正しさを主張することはできず、何が正しい改革であるかについては、つねに統治者と人民の両者の対話的關係のうちで確認されなければならないと考えるのである。

このように、啓蒙に関するカントとメンデルスゾーンの両者の議論を分析することを通じて、ドイツ啓蒙主義における先入見論の実践的次元とその多様性の一端を提示することができた。このことは、カントとメンデルスゾーンの関係について検討するに当たって、重要な視点を提供するものであるとともに、先入見のもつ道徳的・政治的意味を考察するうえでも、重要な寄与をなすものであると考えられる。

(2)カントの先入見批判の精神を受け継いだ一例として、アーレントの判断論を取り上げ、それをとりわけ「普遍主義」ないしは「世界市民主義（コスモポリタニズム）」との関係から論究した。

アーレントの判断論のうちには、ギリシア的な政治活動を強調する「ポリス」の思想家としての側面と、カント的な普遍性を志向する「コスモポリス」の思想家としての側面がともにあることは、従来から指摘されてきた。しかし、両側面を、バイナーのように前期から後期への移行とみなすにせよ、あるいは観念の違いにすぎないとみなすにせよ、両側面の関係が十分判明にされてはこなかったと言える。そこで本研究は、アーレントの判断論における特殊主義的な契機と普遍主義的な契機との関係について考察し、そのさい「判断」と「先入見」との関係に注目して再検討を加えることを通じて、次のことを明らかにした。

まずアーレントは、先入見を自動的な判断基準にしてしまうことを批判したが、先入見そのものを全面的に退けているわけではな

く、先入見は「過去の判断」として一面の真理を含んでいると主張する。そして、アーレントは、カントに倣って、判断を可能にするのは「共通感覚」であると主張するが、共通感覚は、現在の判断と過去の判断すなわち先入見によって形成される。つまり、共通感覚は、先入見の積み重ねで豊かにされてゆくとともに、前例のない出来事に直面したときには、新たな判断によってより普遍的なものへと更新されてゆくものなのである。この意味において、アーレントの立場は「特殊主義に根ざした普遍主義」として特徴づけられるということが判明になった。

さらにアーレントは、たとえば全体主義の体制下のように、共通感覚への訴えかけが不可能な状況下では、特殊主義的でも普遍主義的でもない第三の判断論として、「思考」における自己内対話に引きこもる道も示唆している。しかし、こうした「個体主義」的な判断論は、あくまでも例外的なものであり、緊急の措置にすぎないとも述べている。それゆえ、アーレントの判断力論を整理するとすれば、通常状態では「特殊主義的（アリストテレス的）な判断論」を背景に「普遍主義的（カント的）な判断論」を志向し、例外状態では「個体主義的（ソクラテス的）な判断論」によって危機対応するという、三幅対の構造として把握しうることを解明した。このように、アーレントが危機的状況に直面したさいに、人間の能力そのものを批判し、その範囲と限界を確定しようとしたところにも、アーレントに受け継がれたカントの批判精神を見いだすことができるだろう。

以上の成果は、アーレント研究の根本問題を解決する重要な寄与となるだけでなく、カントの判断論や政治哲学の研究にも重要な視座を提供するものであると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①千葉 建、共通感覚と先入見—アーレント判断論におけるカント的要素をめぐって—、『倫理学』（筑波大学倫理学研究会）、査読無、第27号、2011年、pp. 71-81、<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M10/M1069613/7.pdf>

②千葉 建、啓蒙と先入見—1780年ベルリン・アカデミー懸賞問題からみたカントの啓蒙論—、『哲学・思想論集』（筑波大学人文社会科学部研究科哲学・思想専攻）、査読有、第35号、2010年、pp. 129-141、<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/M10/M1031747/5.pdf>

〔学会発表〕（計2件）

①千葉 建、アレント判断論における先入見—アレントのカント解釈をめぐって—、筑波大学哲学・思想学会、2010年10月30日、筑波大学（茨城県）

②千葉 建、啓蒙と先入見、現代カント研究会、2009年7月26日、法政大学92年館（東京都）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千葉 建 (CHIBA KEN)

筑波大学・人文社会系・講師

研究者番号：80400620